

「 渴いている人は来なさい 」

ヨハネによる福音書

第7章37節～39節

説教 岡村 恒牧師

今日は聖霊降臨祭、ペンテコステの日曜日です。主イエス・キリストは十字架の上で死んだ後、墓に葬られました。そして三日目、墓を空にして復活されました。この復活された主イエスは40日の間、大勢の人に会い、話をし、食事を共にされ、弟子たちが見守る中、天に昇られました。十字架に磔になる前夜にも言われたように、「あなたがたのために場所を用意しに行く」(ヨハネによる福音書 14章2節)のために、主は天に昇られたのです。

ペンテコステの日、主イエスに命じられた通り、エルサレムを離れずに待っていた弟子たちに、「助け主」主イエスの霊が注がれました。今から2,000年前の遠い昔の出来事ではありません。あの日弟子たちに聖霊が降ったので、今ここで、私たちは礼拝をしているのです。

み子イエス・キリストを救い主と信じて洗礼を受けるなら、誰でも賜物として聖霊を受けることが、聖書には約束されています。私たちの罪に満ちた肉体、私たちの人生全体が、聖霊の宮とされる、と聖書は宣言します。しかも、私たちの内に聖霊が宿るだけでなく、私たちの内から「生きた水が川となって流れ出るようになる」(38節)とまで言われています。

この日主イエスは、〈仮庵(かりいお)の祭り〉を祝うエルサレムにおられました。エジプトで奴隷だったユダヤ人を、神はモーセを遣わして解放なさいました。エジプトを脱出したユダヤ人が40年間荒れ野をさまよった時、彼らは、神の手によって水と食べ物を与えられて生かされ、ただ神にだけ信頼して生きるように導かれました。仮庵の祭は、神によって生かされたことを記念する祭りです。祭司が祭壇に水を注ぎかけて、神が先祖たちの祈りに応えて、荒れ野で水をお与え下さったことを感謝する時、群衆は歓喜の叫びを上げ、歌い、踊ります。町中に水があふれるようなこの祭りの中で、主イエスは大声で叫ばれました。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。」(37節)。

主イエスの目には、私たちの真実の姿が見えるのです。水があふれ、豊かに生き、歌い踊っているように見えながら、本当に無くてはなら

ないものを手にしておらず、渴ききっている私たちの姿を、主はご覧になり、深くあわれんで下さるのです。自分が渴いていることに気づかず、渴ききって朽ち果てようとしている私たちを、主イエスは放置なさらないのです。「わたしのところに来て飲みなさい」と招かれます。

こう言われた主イエス・キリストは、私たちの身代わりとなって十字架の上で死んで下さったお方です。誰よりも深く絶望を味わい、命の全てを注ぎ出して渴き切って下さったお方です。その命を代償に、神は私たちの罪を赦し、地の塵(ちり)から造られた私たちに、命の息を吹き入れて「生きる者」として下さいました。失われることのない命を生きる者として下さる、この約束を主イエスが実現して下さいました。

神に裁かれ、死んで葬られるはずの私たちに代わって、主イエスが十字架の上で死んで下さいました。だから、主イエスを信じる者は、もはや裁かれることがなく、死から命に移されているのです。そして、神の命を自分自身の内に宿して生きています。御子の霊を受けるので、御子と共に神の相続人となり、全知全能の神に向かって「父よ」と呼びかけて生きるのです。

自分自身が渴いていることに気づかないような私たちに、神はみ顔を向けて、御子の血による赦しと確かな命を与えて下さいました。神の約束を信じて、永遠の命を注ぎ入れて頂いて、私たちは生きるのです。神の愛を注がれて隣り人を愛し、神の約束によって希望を抱いて生きるのです。変わることはない神の約束は、必ず事実となっていくのです。

ペンテコステ以降、聖霊なる神は変わることなく激しく働いておられます。心を開いて、神が注ぎ入れて下さる恵みを受け止め、終わりの日を待ち望みながら、一日一日目覚めるたびに、神の命に生かされていることを心に留めて歩みましょう。私たちの地上の旅は、ほんの一瞬と言えども、神と無関係な瞬間などありません。聖霊が降って、離れることなく共に居て下さるからです。

(記 岡村 恒)